話題９３　本の紹介：　　大学生が見た日本の刑務所（２）

居場所がない～高齢者・万引き・再犯～

玉城　英彦著

２０１９年年１月１３日の琉球新報、「晴読雨読」の欄で著者の玉城英彦教授とその著書を紹介した。時に、大学生が見た日本の刑務所～刑務所には時計がない～と題する衝撃的な空間がその舞台であった。

課題は残されていた。「刑務所には時計がない」。静止したこの空間から、現実の社会にどのようにして連続性を持たせるかにあった。

玉城教授は、北海道大学で教鞭をとり、世界へ羽ばたく若者達の背中を押す。「新渡戸稲造カレッジ」のゼミでもって若者を刺激する。現代社会の日常性の中に埋もれている常識の壁に、風穴を開ける一つの手法でもあろう。

高齢化社会を迎えた。確かに、生活の基盤をなす「居場所」が無い。決して、凶悪な犯罪ではない「万引き」。高齢者に多くみられる現象であり、繰り返されることが多い。その要因を、個々人の内面に求めるか、社会との関わりの中に求めるか。縦軸と横軸。多分にその両者が必要なのであろう。しかし、基本をなす両者が交わる場、「居場所」が無いのです。

日常生活の中で、高くて厚い壁を連想する刑務所と称される空間の、その内側を覗く機会は皆無に等しい。覗いて見た学生の受けた衝撃は大きなものがあった。刑務所の壁以上に、常識と称される壁の厚みに・・・。

「知・情・意」。多方向からのアプローチにより、日常との壁、その垣根をよりスムーズに通り抜ける道筋が必要かもしれない。地域に、居場所を設定して。

空間は異なるが、私は、介護老人保健施設で高齢者の健康管理に従事している。入所者の平均年齢は８０歳代。約８割の方々が認知症を合併している。制度として、この施設の目標は、介護とリハビリを介して在宅へと誘導する場と定義されている。８０歳代。残念ながら、少子高齢化社会の到来に伴い、この方々にも帰る「居場所がない」のです。

刑務所と称される空間が、その国の風土、国民性をも表現しているとの指摘である。風穴から、今一度、日常の世界を覗いて見たい。